令和6年度　学習分析事業　改善計画シート　三原市立第五中学校

【別紙】

1．本年度の結果

①学力定着分析　NRT　偏差値平均（全国を50とする）

		国語	社会	数学	理科	英語	全体
1年	前年度結果 偏差値平均						
	本年度結果 偏差値平均	48.2	48.9	48.5	50.1	48.9	48.8
2年	前年度結果 偏差値平均	48.8	46.8	49.3	49	50.5	48.8
	本年度結果 偏差値平均	46	47.1	47.3	46.2	50	47.2
3年	前年度結果 偏差値平均	47.7	46.7	47.3	46.6	46.9	47
	本年度結果 偏差値平均	47.5	46.5	45.8	46.2	45	46.2
全体	前年度結果 偏差値平均	49.2	49.6	48.3	49.6	49.8	49
	本年度結果 偏差値平均	47.23	47.5	47.2	47.5	47.97	47.4

②全国学力・学習状況調査　正答率平均（第3学年対象）※全国を100とする

教科	国語	数学	英語
前年度結果 （対県比）	69(99)	47(96)	38(88)
本年度結果 （対県比）	56(96)	47(90)	

2　令和5年度について

①調査から明らかになった課題

【年度当初の学力について】（NRTをうけて）
●各教科の領域別で全国比90％未満のもの
・社会　原始から古代の日本（2年生86％）、中世の日本（2年生76％）、近世の日本（3年生88％）、近代の日本（3年生82％）
・数学　数と式（2年生82％、3年生81％）、図形（3年生87％）、関数（2年生88％、3年生78％）
・理科　身近な物理現象（2年生87％）、身の回りの物質（2年生87％）、電流とその利用（3年生85％）、気象とその変化（3年生87％）
・英語　話すこと（2年生87％）、書くこと（2年生78％、3年生79％）
昨年度に90％未満だったものは、数学　数と式（2年生87％）、理科　身の回りの物質（2年生89％）であったため、大幅に増加している。

【年度当初の学力について】（全国学力・学習状況調査をうけて）
●国語は、評価の観点において、知識・技能は県の平均より0.5ポイント上回っている。一方、「情報の扱い方に関する事項」が県の平均より、−5.4ポイントと下回っている。このことから意見や根拠など情報と情報との関係を適切に理解することに課題があると考える。また領域の「読むこと」についても県の平均より−4.5ポイントであった。特に問題2三は県の平均より−6.2ポイントであることから「文章の中心的な部分と付加的な部分について叙述を基に捉え、要旨を把握すること」に課題があると考える。
●数学は、県の平均と比較すると思考・判断・表現は0.8ポイント上回っているのに対して、数学的な知識・技能を問う問題の正答率が県の平均より－3.8ポイントであったことから、「基礎的な数学的知識及び活用の習得」に課題がある。領域別で分析すると県の平均より数と式は−3.8ポイント、図形は−4.5ポイント、関数は−1.4ポイント、データの活用は+1.5ポイントであった。このことから、空間における図形の認識や立式しての計算について課題があることや「自然数」や「累積度数」など数学用語を理解できていないと考える。
●英語は、県の平均と比較して－5ポイントであり、特に「読むこと」の領域は県の平均より−10.9ポイントであることから、「読むこと」に関する領域に課題があると考える。また、文法事項としては、語順の理解や文構造について理解が不十分であると考える。また、全体的に県の平均より無解答率が高い傾向にあり、与えられたものを適切な形に直したり、不足している語を補ったりする問題については県の平均に比べて比較的解答できているが、問題を読み取り適切な内容を選択するなどの回答は県の平均を下回る。

②課題改善に向けた学校組織全体の重点目標・取組

重点目標　（何を、どの程度達成するか）	達成のための具体的取組　（どのようにして）	スケジュール	検証の指標・目標
【授業改善を通した学力・学習意欲の向上】 ①ICT機器を積極的に活用した授業づくりに向けた資質能力の向上。 ②全教員で「本質的な問い」の設定を意識した授業を実施。 ③定期試験ごとの「テスト直し」の実施と、レポートやドキュメントによる可視化。 ④教科ごとで授業改善による課題把握・分析、研究授業、検証、改善。 ⑤家庭学習の量（時間の増）・質の充実。30分未満の生徒数の削減。 ⑥学力の低い生徒に対する積極的な学習支援。 ⑦全国学力・学習状況調査に向けた学習支援対策。	①モジュール学習で全生徒が学習時間を確保し、ICT機器の活用と学力向上を目指す。 ①各授業ごとに小テスト等を行い（フォームの活用）、基礎学力の定着を図る。 ②全教員が研究授業時に単元構想シートの作成に取り組み、「本質的な問い」の設定を意識した授業を実施することで授業改善を図る。 ③全教科で実施し、生徒にレポートやドキュメント等を作成させ、思考力・判断力・表現力等の育成と、成果物に対する事後指導の徹底・評価の還元。 ④各教科の専門性を生かして学力における課題を「焦点化」し、取り組みを毎時間の授業や家庭学習の中に取り入れて授業改善を図る。また長期休業を活用して現状把握や分析を行い、全教職員で共有し、効果的な取組は取り入れる。 ⑤授業や家庭学習の取組事例を全教職員で共有し、効果的な取組は取り入れる。 ⑥学校組織体制の中に「学力向上部」を創設し、放課後に部活動の時間と並行して全生徒の学力向上に向けた取組の実施。また、「学力向上部」と各学年をタイアップした「サマースクール」（学力補充期間）を実施する。 ⑦全教職員で通過率の低い問題の傾向を把握するための研修会を実施する。	①4月から実施 ①各学期1回 ②5月からの1人1研究授業で順次実施（全員） ③各学期1回 ④5月から順次実施→9月から追加実施 ⑤各長期休業期間中に実施 ⑥放課後学習→毎週、サマースクール→長期休業で実施 ⑦各学期1回	①一人一授業提案 ②1人1授業時に単元構想シートの作成を必須化し、冊子にして全教職員に配布 ③教職員アンケートの肯定的回答率（「振り返り」に関する設問）80％以上 ④定期試験も含めて、学年部・各教科で改善策を検討・実施 また、各教科で子どもの変容がわかるように指導（授業）→実カテスト→分析の流れを構築し、研究主任が集約する。 ⑤⑥⑦各学期実施後研修の場を設定し、分析と評価を行う
【学級・学習集団づくり】 ①生徒総会や運動会、絆祭等の行事を通して生徒の自主性・主体性を育成する。 ②QUの結果を、講師を含め全教職員で共有する。 ③QUを活用して、全ての生徒と学期に1回以上の教育相談（面談）を行う。 ④全学級で、提出物を期日を守って提出させる取組を通し、最後までやりきらせる達成感と責任感を養う。 ⑤全学級で、生徒が安心・安全に過ごせる情報モラル教育を実施。	①生徒会顧問を中心に、生徒の意向や思いを把握するとともに、実現に向けた指導・支援を行う。 ②QUに基づく、SCと各担任とのコンサルテーションの実施。 →QUの結果を、全体共有※必要に応じてSCと連携 ②ふれあい教室（校内・外）と保健室、担任の密な連携で生徒に寄り添った支援。 ③「第GOノート」を活用した生徒の実態把握と指導、保護者連携。 ③保護者との密な連携や家庭訪問、三者懇談の実施。 ④学力向上部での学力補充の実施により、学力向上と学習意欲の喚起。 ⑤生徒指導部と連携したchromebook使用における全学年統一ルールの運用	①随時 ②QU結果判明後（2回※1回目は9月中に実施） →9月から追加実施 ③学期に1回（生徒アンケート・面談） ④随時 ⑤随時	①・②・③生徒アンケート ・学校生活への満足度（90％以上） ・「自分にはよいところがあります。」に対する肯定的な評価（80％以上） ・「主体的な地域活動への参加」についての肯定的評価（80％以上） ②・③QUでの一次支援の数値向上（全学級で1回目以上） ②・③・⑤生徒・保護者情報の一元化（主任・管理職への報・連・相）

3　令和6年度について

①調査から明らかになった課題

【学力調査について】
（NRTをうけて）
●国：1年生は「書くこと」に課題がある。特に「漢字の書き」に課題が見られた。2年生、3年生は「読むこと」に課題があり、特に「主題や構成を読み取る」ことが全国平均に達していない。
●社：知識・技能、思考・判断・表現の両観点が全国平均に達していない。全学年に共通する課題として、歴史的分野の正答率が低い。1・2年生は「中世の日本」、3年生は「近代の日本」の正答率が低かった。観点別では、思考・判断・表現の観点に課題があると考える。
●数：1年生は「関数」に課題がある。特に「百分率」に課題が見られた。2年生、3年生は「数と式」に課題がある。特に2年生では「小学校までの計算」、3年生では「中学1年までの計算」に課題があると考える。
●理：1年エネルギーの分野で全国比96%となっており、特に「電気の働きと利用」95%に課題が見られた。また、小問別集計の有意差検定からは、思考・判断・表現よりも知識・技能の観点に課題が見られる。
2年生は、「大地の成り立ちと変化」の分野で全国比83%となっており、特に「火山活動と火成岩」78%、「地層」79%であった。小問別集計の有意差検定からは、思考・判断・表現と知識・技能の観点に大きな差がないが、いずれも低位であることから、まず知識・技能の向上が課題である。3年生では、気象の学習において「海陸風の仕組み」と「天気図の季節の特定」について課題である。
●英：「書くこと」に課題がある。特に「適切な表現を用いて英語を書く」等の条件にあった内容を自分で考えて書く力が身に付いていない
（全国学力・学習状況調査をうけて）
●質問紙（21）・（22）より、本校の生徒は全国や広島県に比べて平日・土日ともに家庭学習の時間が少ない。
●本校の生徒は全国や広島県に比べて、自分の考えをうまく伝える発表の仕方の工夫が不十分という課題がある。
●本校の生徒は全国や広島県に比べて、ICTを授業時間で多く活用している一方で、家庭学習など授業時間外での利用は少ない。

②課題改善に向けた学校組織全体の重点取組等

重点取組上記課題を踏まえたもの）	具体的方策(継続して取り組めるもの）	検証指標及び時期
【学力向上ついて】 ・情報と情報との関連付け【社・理・英】 ・長文の読み取り【国】 ・まとまった文章を書くこと【英】 ・四則計算の確実な定着【数】	①全学年全教科等でのR8Oの実施（必須） 国：漢字テストの実施。授業内で音読練習を行う。テストの振り返りシートによる自己分析。 社：単元末に既習事項の確認ミニテスト実施（70%以上） 数：モジュールの活動を通して、既習の問題の復習を行う。 理：1年はエネルギー分野の復習→ドリルパークを利用した復習の実施。知識定着→授業の最初5分間での復習問題の実施。2年は「大地の成り立ちと変化」の分野の復習。小テストを行い各自の実力を把握させる→授業時間内での5分間振り返り学習を行う。3年は該当の設問や類似の設問を学習素材として映像資料を交えることで視覚的に捉えさせる。また、演習問題に取り組ませる。 英：場面・目的・状況を明確にしたテーマ設定のもと、生徒に作文させ、書いたことにコメントや添削をして返す。	国：校内定期考査（各学期)にて検証 社：校内定期考査（各学期）にて検証 数：4月実施の実カテストと比較して、来年度実施の実カテストを＋5ポイント以上の達成度を検証。 理：1年はドリルパークにおけるエネルギー分野の小テスト実施（正答率80%以上）2年は定期テストでの考査検証。3年は小テストの実施により達成度を検証する。 英：学期末試験での作文問題の正答率にて検証
【学級・学習集団づくりについて】口 ・学習規律・学習環境の整備 ・安心できる居場所づくり	①日々の生活および授業の規律の徹底・エンカウンターの実施（SHRで表現活動）・積極的な個人面談の実施 ②授業の規律の徹底・個人面談の実施・1分間スピーチでの表現活動の充実 ③積極的な個人面談の実施・1分間スピーチでの表現活動の充実	○最低学期に1回以上 ○HR活動やモジュール学習の時間を活用